ラブカクテルス　その73

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス　その７３

【Ｎコード】

Ｎ６６７８Ｅ

【作者名】

風　雷人

【あらすじ】

今宵は早く飲みたくなるカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前はスピード狂Ｒでございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺は昔っからスピード狂だった。
目覚めたのは、幼稚園の時に遊園地で父親と乗ったジェットコースターだった。
それまで速い、と体験した物と言えば公園にあるコーヒーカップの回転くらいで、父親は安全主義だったせいもあり、車を運転している時などは、ただの移動手段の道具としか感じさせない運転で、速いという感覚はその時には感じることさえしなかった。
しかしジェットコースターは違った。
なんといっても、上半身が乗り物から外に出ていて、いかにもスピードを体感できるといったそのスタイルは、その頃の俺が迫力という未知のゾーンに入るには十分過ぎるものだった。
なんで皆こんなに並んで、一体何を待っているのだろうか？
初めはそう思った。

しかしだんだんとそれに近づいて行くにつれ、何やら悲鳴のような声が響き渡っているのに気付いた。
と、一瞬目についた人垣となった行列の隙間から見えた弾丸のような物。
なんだろう、あれは？
俺はなぜか心臓がドクドクと、熱くなってきたことを感じ始めた。
そしていよいよ自分の番が来て、その初めての乗り物に肩を押さえられるように安全装置を下げられて、そしてガクンと走り出したと同時に、そのドキドキ感がワクワク感へと変わるのがわかった。
ゆっくり上がった坂は急で、遊園地が一望できるほどの高さに俺は目を瞑った。
それを最後に凄い風が上半身を襲い、身体が自分の意識を無視してかき混ぜられるような衝撃で振り回されたことは、頭中が真っ白になっても体が感じ取っていた。
ジェットコースターが止まった後、あまりのショックに子供の俺は放心状態となった。
父親はそんな俺を見て、恐怖に腰を抜かしたのか？とからかったが、実はこの時俺の中のどころかにあるスイッチが、ガチンとオンになったことに、誰もが気付く事がなかったのだった。

それから俺は少年ながら、そのスピード感が忘れられなくなり、その頃の愛車の自転車で飛ばしまくることとなった。
しかし運転ということに関して俺はあまりに未熟だった。
下り坂を加速してスピード感を味わっては、正面の畑に突っ込んだり、町中では曲がり損ねて電柱や塀に激突しては気を失い、挙句の果てに足を骨折する騒ぎまで起こし、そのうち自転車を取り上げられるハメにもなった。
俺は仕方なく、急な斜面の原っぱでソリをして遊ぶくらいでしかスピードを感じることができなくなり、しかしそんな遊びを一緒にしてくれていた友達もだんだん呆れてか、いなくなった。

そんな中、俺もスピードにのめり込むのを諦めざるを選なくなり、しばらくの間スピードのそれから自然と遠ざかり、やがてあの時入ったスイッチも、いつしかオフになったようだった。

そして、また俺がスピードに目覚めることとなったのは大学時代の夏だった。
貧乏学生だったのもあり、暇はもてあましていたそんな時、友人の一人がバイクを買ったと自慢しにきたので、俺はそいつの後ろに跨り、熱帯夜の街道に繰り出そうということになった。
大して乗り心地が良くないバイクだったが、それなりにスピードは出せるようで、友人は自慢気にアクセルを開きスピードを上げた。
そして調子に乗った友人が飛ばし始めた時、俺の眠っていたスピードへの欲求が久々に目覚めた。
風を全身に浴びて、まとわり着く湿気を一気に吹き飛ばすそのスピードに俺はニヤついた。
後ろに乗せてもらっている分際のくせに、俺は友人を煽りながらスピードを加速させ、その感覚に言い様のない興奮を思い出して震え始めていた。
その夜の次から次にぶつかって来る湿った空気の壁でさえ、なんだか気持ちのよい音楽のように自分の中をスルーしていく。そんな満足感。
俺は嫌がり始めた友人にアクセルをめいいっぱい開けさせて、そんな夜空に叫び声を挙げるのだった。

俺は早速自分もバイクの免許を取り、かき集めた金でとりあえず、速く走るバイクを買い、水を得た魚、又は首輪を外された犬、はたまた檻から放たれた鳥のように、アクセル全開にして飛ばしまくった。
初めはなるべく夜の道を選んで滑るように走しり、どんなに速い相

手がいきなり勝負を仕掛けて挑んできたとしても、俺は負けなかったし、そんなスピードを出せる自分に酔った。
最高の気分だ。
そのうち俺は四六時中そんな勢いで公道を走り回るようになり、警察に目を付けられ、そしてとうとう、待ち伏せされた検問でオナワとなることとなった。
その結果は免許が取り消しとなってしまったが、しかしそれでも俺は構わないと思った。
なぜなら俺はその時にはもう、バイクのスピードに飽きていたからだった。
まだまだ物足りない。もっともっとと、心が欲している。それをヒシヒシと感じ、俺は探し始めた。

そして次に俺が向かったのはサーキットだった。
スピード気違い繋がりの知り合いから誘われ、その借り物のＦ１マシンに乗れることになったのだ。
これはかなりの暴れ馬だ。
俺は幾度となくコースをはみだしながら、その暴れ馬を走らせたが、コーナーなどのおかげで加速減速を繰り返すせいでスピードを素直に出せないストレスから、サーキットでのレースなどは自分には向いてないことを、それほど時間を掛けずに俺は悟った。
直線だけのスピードを競うレースもあり、何度か試してみる機会もあったが、あまりの金の掛かるこのジャンルにはついていけなかった。
やはりスピードを活かせる仕事に着きたい。
やりたいことをして生活していけるうまい方法はないか？
俺はだんだんとそう思うようになり、そしてどうせならと、新幹線の運転手を目指すことにした。
なかなか簡単には、当然なれないその運転手までの道のりは険しく、

数々の難関をつまづき、倒れ、それでもまた挑んで、そしてとうとう何とか狭き門を執念でくぐり抜けた俺は、新幹線の運転手に採用されることとなった。
しかもその中では一番スピードの出るモデルだ。
俺は興奮した。何しろ決まったレールの上をただただスピードを上げて飛ばすのが宿命みたいな、障害物も何もない、バイクの倍は速度も出せる乗り物だ。期待しない方がおかしい。しかもお客は俺のスピードを宛てにして乗り込んでくるわけだ。
天職とはこういう事を言うのだろう。
俺はようやくその初日を迎え、緊張の中で車掌の合図とともに新幹線の運転席にあるレバーをゆっくりと引いた。
しかし、意外に新幹線はガラスとボディに自分の身体が囲われているからか、スピード感に迫力がない気がした。
やはり風を浴びて走るか、Gを受けるような体感がないとスピードを出している意味に欠ける。
そう思った俺は、乗せているお客のことを忘れて、車両をいきなりめいいっぱい加速させた。
何だか車掌さんの声がスピーカーから聞こえたようだったが、俺は引いたレバーを緩める事なく、停車駅も忘れて、終点まで新幹線をぶっ飛ばした。
いきなりかかった時の加速におけるGはまあまあだったが、速度が乗ってしまった新幹線は、さすがに旅客のために作られただけあって、驚きの安定感を維持し、大して期待した迫力は得られずに、なんだか俺の肌には合っていないような感じで、俺はガッカリした。
俺が求めているのはこんなものじゃない。
俺は新幹線から降りて、またさらなるスピードへの道を追求すべく転職を考え、それを会社にそれを言い出そうとする前に、凄い剣幕で怒られた上にクビになったのだった。

ジェット機のパイロットを目指すことにした。
これならまず、真っ直ぐ飛ばすことに事欠かないし、俺の満足感を満たす何かがある筈だ。
それに加えてスピードも出し放題だせるに違いない。
かなりの難しい試験を何度もチャレンジし、過酷な訓練にも俺は挑んだ。
鬼軍曹に非情にしごかれ、それでもがむしゃらに頑張ったその結果、気がつくと俺はパイロットになる事に成功していた。
いよいよ俺は未知なるスピードの世界に行ける。
その嬉しさに身震いさえしながら、俺は訓練飛行に参加し、そして音速のGをいきなり体感するなり、そのスピードに酔い知れた。
身体と心が分離するような感覚が堪らなく素晴らしい。
俺はニヤニヤしながら操縦桿を思いっ切り引き上げ、マックスのGに歓喜の叫びを挙げた。
と、同時に俺は眩しい光にいきなり包まれ、不思議な感覚、まるでプカプカと空中を浮いている様ななんとも言えない気持ちの良い気分に自分が包まれているのに気付いた。
これはもしや、噂に聞く神様の領域。
俺は強く力を入れて操縦かんを握っていた腕を少し楽にして、外の風景を眺めた。
強く、しかし柔らかそうなその光に包まれている。そんな、温かささえ感じる不思議な光の景色に心打たれ、俺はなぜか目から流れるものを感じたのだった。

気が付くと、俺は真っ白いベッドの上に寝ていた。
不思議となんとも身体が軽く、何だか具合も悪くない。
しかしここがどこだかが全く見当もつかずに、身体を起こして周りを見回した。
すると、少し離れたところにあった扉が、不思議な電子音のような、

何かの声のような音と共に、滑るように開いた。
そして俺はタマゲた。
なんとそこにやってきたのは、上から下まで銀色の体にぴったりなスーツを着た頭デッカチの、いかにも宇宙人くさい奴がこちらに向かって入ってきたのだった。
俺はあまりの唐突なこの出来事に、かなり戸惑った。
そんな俺の様子を見たその宇宙人らしきものは、やはり自己紹介を、宇宙人ですと、なぜか俺に分かる言葉でしてきた。
俺は思わず、夢なのか？と思いつつも、やっぱりな、と半ば舌打ちをする勢いでそのありきたりな回答に応えるように言うと、その宇宙人は、あまり驚かない俺に不満そうな顔をした。
気まずくなってしまった雰囲気に、俺はその広くない部屋に一つだけあった丸い窓に、ふと目をやった。
するとそこには宇宙らしき景色があり、俺は声を挙げて感激しながら、それの近くに走った。
確かに宇宙だ。
キレイな星々達がキラキラと輝き、その下の方に地球が見える。
どおりで体が軽い筈だ。
そんな俺がガラスにへばり付き、興奮している様子を見た宇宙人は、さも自慢気になりながら、俺に近づいてきた。

どうだろう？宇宙船に乗っている気分は？
我々は偉大な宇宙生命体だ。実はこれから君のいた星を頂きに行きたいのだが、その前の下調べで、君にニ、三聞きたい事があり、それで拐ってきたのだが、暴れても無駄だし、嫌がっても逃げられないのはその景色でわかってもらえると思う。
その話しを聞いた俺は、宇宙船？イコール速そうだな、と、連想し、宇宙人に、
わかった。素直に言うことを聞いて、何でも協力するから運転席を

見せて欲しいと頼んだ。
宇宙人は不思議そうな顔をしたが、すぐに勝ち誇ったかのように、いいだろう。やっとこちらの偉大さがわかったみたいだなと、俺に着いて来いと言って、運転席までの案内をし始めた。
俺は興奮を一層高めた。
きっと地球では味わえない程の、想像を絶するスピードが体感できる筈だ。
運転席に着いた俺は、宇宙人が何やら説明し始めた話もろくろく聞かずに、取り憑かれたように運転席の操縦桿に誘われるがまま、それを握った。
何か後ろの方で、やめろという声がした気がしたが、その時にはもう、俺はその
操縦桿を思いっ切り手前に引いていた。
すると、まるで体が引き千切られるくらいのGが俺を襲った。
最っ高だ！
俺はまるで…

あっ、流れ星だ。
お願いしないと。世界が平和でありますように。
あれ？なんか流れ星が曲がったような。
そんな筈はないか。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6678e/

ラブカクテルス　その７３

2010年12月30日20時55分発行